文化的目標の価値規準的機能についての実証的研究

米川茂信

1　研究の目的と方法

筆者はさきにアノミー概念における文化的目標の実証的研究を試みた[1]。そこでは，マートンのアノミー概念において中心的位置を占める文化的目標の概念の現実妥当性――現代日本社会における文化的目標の存在事実――が，つぎの6点から実証された。①地位，富，学歴，業績，能力という主要価値実体が存在している。②このうち，地位，富，学歴，業績の4つは目標価値として文化的に価値づけられている。③地位，富，業績の3つは，さらに，成功目標としても位置づけられている。④これらの成功目標は，いずれも，人々の欲求ないしこれを規定する価値観の規準としての機能を付与されている。つまり，人々のアスピレーションの準拠枠をも内包している。⑤成功目標として位置づけられている地位，富，業績という目標価値について，とりわけ前二者について，それらを達成すべく努力することへの文化的強調が顕在的，潜在的にみられている。⑥このような文化的強調は一種の規範的性格をも内在している[2]。(以上の6点ともその実証は，新聞広告に掲載された単行本，雑誌等の出版物の題名，見出し，コメント・解説・紹介記事等にみられる語句とその文脈を整序，分析することによって試みられた)。

しかしながら，上記の④つまり文化的目標の価値規準的機能については，つぎの3つの視点から，すなわち，「人々の欲求ないし価値観にマスコミは影響力をおよぼしているか否か」，「人々の欲求ないし価値観に新聞広告は影響力をおよぼしているか否か」，「地位，富，業績といった目標価値について，その達成方法等に対しても文化的強調がなされているか否か」という視点から間接的に実証されているにすぎない[3]。また，文化的目標の価値規準的機能が間接的にせよ実証されたとしても，そのことからただちに，文化的目標の価値規準的機能の実態が明らかにされたということはできない。本稿の目的は，文化的目標の種々の価値実体がどの程度人々のうちにその生活目標[4]として浸透しているかを，より直接的な方法に

よって実証的に捉え，文化的目標の価値規準的機能の現実を明らかにすることにある。

この目的に照らして，成人，大学生，高校生および中学生を対象に，質問紙による統計調査を試みた。調査の実施時期は，成人については昭和60年１－２月，大学生については昭和59年12月－60年１月，高校生と中学生については昭和60年１－２月であった。

調査方法は，成人については郵送法を，大学生，高校生および中学生については集合法を採用した。

調査対象者は，東京都および千葉県に居住する20歳以上の成人男女，１年次生から４年次生までの文科系の大学生男女，東京都内の高等学校に在学する１・２年生の高校生男女，同じく東京都内の中学校に在学する２年生の中学生男女の４グループである。

調査対象者の抽出は，成人については，有権者数を基礎に二段サンプリングにより行なった。第一次サンプリングでは，母集団を東京都23区，同多摩地区，千葉県第１・第４選挙区地域（比較的都市化の進んだ地域）および同第２・第３選挙区地域（比較的都市化の進んでいない地域）に層別し，各層から確率比例サンプリングにより港区，日野市，千葉市，成田市を調査地区として抽出した。第二次サンプリングでは，各調査地区のサンプル数を比例割当法により割当て，これを選挙人名簿を台帳として等間隔に抽出した。サンプル数は，当初1,000と設計したが，実際には，港区511，日野市206，千葉市208，成田市108の計1,033となった。回収サンプル数は474，回収率は45.9％であった。

大学生については，私立総合大学２校，私立単科大学１校，地方国立大学１校の計４校を選定し，それぞれから調査対象の授業クラスを任意に抽出した。回収された有効サンプル数は，それぞれ順に，164，85，99の計348であった。高校生については，私立男子校１校，私立女子校１校，共学の都立高校２校を選定し（都立高校の１校についてのみ１年生，他はいずれも２年生），各校２クラスを調査学級として任意に抽出した。回収された有効サンプル数は，それぞれ順に，96，98，175の計369であった。中学生については，私立男子校１校，私立女子校１校，共学の区立中学１校を選定し，前二者については２－３クラスを，後一者については５クラスを調査学級として任意に抽出した。回収された有効サンプル数は，それぞれ順に，87,100,181の計368であった。

回収された有効サンプルの性別は，つぎのとおりである。成人 —— 男207,女259，不明８。大学生 —— 男216，女130，不明２。高校生 —— 男203，女165，不明１。中学生 —— 男178，女190。

2　人々の生活目標の実態

表１は，人々がどのような生活目標をどの程度もっているかを示したものであるが，そこ

からつぎのような知見を導き出すことができる[5)]。

1　比較的多くの人々が生活目標として抱いている目標価値としては，社会奉仕，余暇の享受，富，能力・才能，人なみの生活の5つがあげられる。そのうちでも，全体的にみて，余暇の享受，能力・才能，人なみの生活を生活目標のひとつとして捉えている人々がとくに多くみられている。

2　半数ないしそれ以上の人々が生活目標のひとつとして捉えている目標価値を，その割合の大きい順からあげてみると，成人では人なみの生活，余暇の享受，社会奉仕の3つがあげられる。また，大学生では能力・才能と余暇の享受の2つが，高校生と中学生では能力・才能，余暇の享受，人なみの生活の3つがあげられる。

3　有名，地位，名誉・名声，成功，出世を生活目標のひとつとして捉えている人々は，成人，大学生，高校生，中学生のいずれにおいてもかなり少ない。わずかに，有名と地位が中学生の2割において，名誉･名声が高校生の2.5割弱と大学生の2割強において，成功が大学生，高校生および中学生の2.5割弱において，生活目標のひとつとされている点が注目される程度である。

表1　人々の生活目標（複数回答）

	成　人 N＝466	大学生 N＝346	高校生 N＝367	中学生 N＝368
社会奉仕**	50.6%	33.8%	37.3%	34.0%
有　名**	2.1	5.5	13.4	19.6
地　位**	7.3	17.3	17.4	19.8
余暇の享受*	61.8	65.3	65.9	56.5
富**	29.6	32.1	47.4	42.4
能力・才能**	45.7	75.1	74.4	64.4
名誉・名声**	4.9	21.1	22.6	16.6
人なみの生活**	66.3	42.2	54.0	56.0
成　功**	8.8	22.5	23.2	23.4
出　世**	4.5	8.7	11.2	15.8

＊＊は$P<0.01$で，＊は$P<0.05$で有意差あり。

これらの諸生活目標のうち，人々がもっとも重視しているもの（あるいはもっとも重視してきたもの）つまり人々の最重視生活目標の実態についてみてみると，表2のとおりである。表2から得られる知見を要約すると，以下のとおりである。

1　人々の最重視生活目標は，成人，大学生，高校生，中学生のいずれにおいても，社会奉仕，余暇の享受，能力・才能，人なみの生活のいずれかの目標価値に限定されている。こ

のうちでも，能力・才能がとくに注目され，成人を除く，大学生，高校生および中学生においては，これを最重視生活目標とする人々がもっとも多くみられている。成人では，人なみの生活を最重視生活目標とする人々がもっとも多くなっているが，能力・才能を最重視する人々との差はほとんどないといってよい。

2　成人においては5.5割強の人々が能力・才能と人なみの生活のいずれかを最重視生活目標としているが，大学生と高校生では4.5割前後の人々が，中学生では3.5割強の人々が能力・才能を最重視生活目標としている。社会奉仕と余暇の享受のいずれかを最重視生活目標としている人々は，成人，大学生，高校生，中学生のすべてを通じて2割にも満たない。人なみの生活についても，成人を除けば，同様である。

3　有名，地位，富，名誉・名声，成功，出世が最重視生活目標とされることは，稀でしかない。わずかに，中学生の女の1割強が有名を，高校生の男の1割弱が富を最重視生活目標としている点が注目される程度である。

表2　人々の最重視生活目標

		社会奉仕	有名	地位	余暇の享受	富	能力・才能	名誉・名声	人なみの生活	成功	出世	計
成人	男	15.7	0.0	2.0	13.1	6.6	34.3	2.0	22.7	3.0	0.5	100%(198)
	女	17.2	0.4	0.8	18.4	4.9	22.1	0.0	34.8	0.8	0.4	100%(244)
	計	16.5	0.2	1.4	16.1	5.7	27.6	0.9	29.4	1.8	0.5	100%(442)
大学生	男	8.6	0.5	5.3	16.3	5.3	44.5	6.2	9.1	3.3	1.0	100%(209)
	女	15.1	0.8	2.4	15.9	0.8	50.8	4.0	7.9	2.4	0.0	100%(126)
	計	11.0	0.6	4.2	16.1	3.6	46.9	5.4	8.7	3.0	0.6	100%(335)
高校生	男	11.3	3.6	4.6	13.8	9.2	43.1	2.1	7.2	4.1	1.0	100%(195)
	女	14.0	0.6	0.6	14.0	5.5	45.1	0.0	18.3	1.8	0.0	100%(164)
	計	12.5	2.2	2.8	13.9	7.5	44.0	1.1	12.3	3.1	0.6	100%(359)
中学生	男	9.7	1.1	5.7	21.0	7.4	30.7	4.0	18.2	2.3	0.0	100%(176)
	女	9.7	12.4	1.6	13.4	4.3	41.9	2.2	12.9	1.6	0.0	100%(186)
	計	9.7	6.9	3.6	17.1	5.8	36.5	3.0	15.5	1.9	0.0	100%(362)

注1　表頭の計の列の(　)内は実数。

注2　成人，大学生，高校生，中学生の四者間に$P<0.01$で有意差あり。また，成人，高校生および中学生においては，$P<0.05$で性差が認められる。

3 文化的目標の生活目標としての浸透

さきに指摘してあるように，地位，富，成功という文化的目標の主要価値実体[6]を生活目標として抱いている人々は比較的少ないという事実がみられている。もっとも，地位，富，成功のいずれかを生活目標のひとつとしている人々がどの程度の割合でみられているかという観点からみてみると，成人で35.8%，大学生で46.2%，高校生で59.7%，中学生で56.3%，全体で48.7%となり，この数値から判断するならば，文化的目標の主要価値実体が，人々のうちに生活目標として浸透しているケースはほぼ2人に1人の割合でみられているということになる。しかし，このことからただちに，文化的目標がほぼ半数の人々の間で価値規準的に機能しているということはできない。上記のみかたには，地位，富，成功という目標価値を人々が文化的目標として認知しているか否か，という点が考慮に入れられていないからである。

文化的目標の主要価値実体と人々の生活目標との関連をより的確に把握するには，地位，富，成功という目標価値を人々が文化的目標の価値実体として認知しているか否かという点と，これらの目標価値について，人々が文化的目標の規範的側面を認知しているか否かという点とを媒介してみることが必要だと考えられる。マートンのいう文化的目標の概念には，価値規準的機能の側面とともに，価値実体 —— 具体的で個別的な目標価値 —— の側面と規範的側面 —— 目標達成努力の規範的強調 —— とが同時に識別され[7]，そして，後述するところから明らかなように，これらの側面についての人々の認知の有無によって，文化的目標の価値実体の生活目標としての把握率も異なってくるからである。要するに，文化的目標の価値規準的機能は，文化的目標の価値実体的側面と規範的側面についての人々の認知を媒介として，顕現してくると考えられるからである。

表3は，地位，富，成功のそれぞれの目標価値について，人々の文化的目標の価値実体的側面の認知－否定とその程度別に，これらの目標価値が人々の生活目標としてどの程度浸透しているかをみたものである。なお，表頭の「認知」，「やや認知」，「やや否定」，「否定」，「どちらともいえない」は，地位，富，成功のそれぞれの目標価値について，これを文化的目標の価値実体と思うか否かという質問[8]に対する回答としてあげられた「そう思う」，「どちらかといえばそう思う」，「どちらかといえばそうは思わない」，「そうは思わない」，「どちらともいえない」を，それぞれ順に言い換えたものである。

表3　文化的目標の価値実体的側面の認知－否定別生活目標の把握率

		文化的目標の価値実体としての認知－否定の別				
		認　知	やや認知	やや否定	否　定	どちらともいえない
地位	成　人	10.3%	6.9%	0.0%	1.8%	0.0%
	大学生**	25.7	12.4	8.3	8.0	11.1
	高校生	21.5	14.5	10.0	4.5	20.0
	中学生***	29.8	12.2	13.0	15.4	4.5
	全　体***	21.1	11.0	8.2	7.1	9.2
富	成　人***	43.9	33.8	24.0	13.6	6.7
	大学生**	43.8	33.5	27.3	14.0	22.7
	高校生***	60.6	48.2	28.0	31.8	38.5
	中学生**	51.0	43.4	54.2	20.9	36.4
	全　体***	50.3	39.3	32.7	18.8	24.8
成功	成　人	10.6	8.3	6.5	8.9	7.1
	大学生	28.1	19.7	26.5	9.5	25.0
	高校生	22.9	26.4	27.3	20.0	15.0
	中学生*	29.9	16.8	26.1	13.3	20.5
	全　体*	22.1	17.4	19.2	12.1	16.5

注1　生活目標の把握率はつぎの例のようにして算出されている。

$$(例)\ \text{地位の生活目標としての把握率（於認知）} = \frac{\text{地位を生活目標として選択した人数}}{\text{地位を文化的目標の価値実体として認知している人数}} \times 100$$

注2　＊＊＊は$P<0.01$で，＊＊は$P<0.05$で，＊は$P<0.10$で有意差あり。

表3から，成人，大学生，高校生および中学生を合わせた全体において，地位を生活目標として把握している者の割合（以下，生活目標の把握率という）をみてみると，地位を文化的目標の価値実体として「認知」している人々においてもっとも高く（2割強），以下，「やや認知」（1割強），「どちらともいえない」（1割弱），「やや否定」（1割弱）の順となり，地位が文化的目標の価値実体であることを「否定」する人々においてもっとも低い（0.5割強）という事実が指摘される。このことから，地位に関しては，一方における文化的目標の価値実体としての人々の認知と，他方における生活目標としての把握率との間に一定の対応関係が存在し，そして，地位の生活目標としての浸透は，これを文化的目標の価値実体として認知している人々においてより多くみられ，しかも，認知の度合が強く，否定の度合が弱いほ

ど，生活目標として浸透する割合も高くなるという傾向をみることができる。成人，大学生，高校生，中学生の別にみてみると，大学生と中学生において有意差がみられており，そして，このいずれにおいても，おおよそ以上にみたような傾向がみられている。

つぎに，富についての傾向をみてみよう。成人，大学生，高校生，中学生の全体でみてみると，地位についてと同様に，生活目標の把握率は，富を文化的目標の価値実体として「認知」している人々においてもっとも高く（5割），以下，「やや認知」（4割），「やや否定」（3.5割弱），「どちらともいえない」（2.5割）の順となり，富が文化的目標の価値実体であることを「否定」する人々においてもっとも低い（2割弱）という事実がみられている。したがって，富に関しても，文化的目標の価値実体としての認知と生活目標としての把握率との間にほぼ一定の対応関係が存在し，そして，生活目標としての浸透は，富を文化的目標として認知している人々においてより多くみられ，しかも，認知の度合が強く，否定の度合が弱いほど生活目標として浸透する割合も高くなるという傾向をみることができるのである。しかし，富が文化的目標の価値実体であることを「やや否定」する人々における方が「どちらともいえない」とする人々においてよりも，生活目標としての浸透がより多くみられているという点で，地位のばあいとは異なる傾向もみせている。成人，大学生，高校生，中学生の別にみてみると，以上の傾向は成人と大学生においてのみみられている。高校生の傾向は，富が文化的目標の価値実体であることを「やや否定」する人々において生活目標としての浸透がもっとも低くなっているという点で，また，中学生の傾向は，反対に，この種の人々において生活目標としての浸透がもっとも高くなっているという点で，全体的傾向とは異なっている。

最後に，成功についてみてみると，成人，大学生，高校生，中学生の全体でみて，生活目標の把握率は，成功を文化的目標の価値実体として「認知」している人々においてもっとも高くなっているものの（2割強），以下は，「やや否定」（2割弱），「やや認知」（1.5割強），「どちらともいえない」（1.5割強），「否定」（1割強）の順となっている。したがって，成功についても，さきの2つの目標価値と同様に，成功が文化的目標の価値実体であることを認知している人々においての方がこれを否定する人々においてよりも，しかも，認知の度合が高いほど，あるいは否定の度合が低いほど生活目標として浸透する割合も高くなる，という対応関係がみられているといってよい。しかし，「認知」における生活目標としての浸透の割合と「否定」におけるそれとの差が比較的に小さいことと，「やや認知」と「やや否定」との間で生活目標としての浸透の割合にほとんど差がみられていない点で，地位あるいは富とは異なる傾向にある。成人，大学生，高校生，中学生の別にみてみると，中学生においてのみ有意差が認められ，以上とほぼ同様の傾向を指摘できる。

表4は，地位，富，成功のそれぞれの目標価値について，人々の規範的側面の認知－否定とその程度別に，生活目標の把握率をみたものである。表頭の「認知」から「どちらともい

えない」までは，表3と同様に，地位，富，成功のそれぞれの目標価値に規範的側面が付与されていると思うか否かという質問[9]に対する回答としてあげられた「そう思う」から「どちらともいえない」までを，それぞれ順に言い換えたものである。

表4　規範的側面の認知－否定別　生活目標の把握率

		規範的側面の認知－否定の別				
		認　知	やや認知	やや否定	否　定	どちらともいえない
地位	成　人*	7.1%	8.2%	16.3%	4.7%	9.3%
	大学生**	30.6	18.4	17.6	12.6	5.6
	高校生	23.0	16.9	12.5	15.4	26.7
	中学生	26.8	18.9	17.9	16.5	20.9
	全　体***	21.9	16.0	16.0	10.4	15.1
富	成　人	35.4	35.5	31.7	23.9	33.3
	大学生	39.3	36.3	27.5	27.5	19.2
	高校生	50.0	52.0	40.0	36.8	59.4
	中学生	42.6	47.1	44.8	38.4	31.3
	全　体***	42.7	43.0	35.3	28.9	36.7
成功	成　人	9.3	7.1	9.3	10.7	5.4
	大学生	35.1	22.5	20.3	16.7	20.9
	高校生	18.4	28.3	20.5	21.1	27.1
	中学生*	33.3	22.7	20.5	13.9	21.6
	全　体***	24.8	20.7	16.6	14.2	18.2

注1　生活目標の把握率の算出は，表3の注1と同じ手順によっている。
注2　＊＊＊はP＜0.01で，＊＊はP＜0.05で，＊はP＜0.10で有意差あり。

表4から，成人，大学生，高校生および中学生を合計した全体の傾向をみてみると，つぎのとおりである。①地位の生活目標としての把握率は，地位について文化的目標の規範的側面を「認知」している人々においてもっとも高く（2割強），ついで「やや認知」と「やや否定」（ともに1.5割強），「どちらともいえない」（1.5割）の順となり，規範的側面を「否定」する人々においてもっとも低い（1割）という傾向にある。②富の生活目標としての把握率は，富について文化的目標の規範的側面を「認知」している人々とこれを「やや認知」している人々においてもっとも高く（ともに4.5割弱），ついで「どちらともいえない」（3.5割強），「やや否定」（3.5割）となり，規範的側面を「否定」する人々においてもっとも低い（3割弱）という傾向にある。③成功の生活目標としての把握率は，成功について文化的目標の

規範的側面を「認知」している人々においてもっとも高く（2.5割），ついで「やや認知」（2割），「どちらともいえない」（2割弱），「やや否定」（1.5割強）の順となり，規範的側面を「否定」する人々においてもっとも低い（1.5割弱）という傾向にある。

これらから，地位，富，成功のいずれに関しても，文化的目標の規範的側面の認知と生活目標としての把握率との間に一定の対応関係が存在し，そして，生活目標としての浸透は規範的側面を認知している人々においてより多くみられ，しかも，認知の度合が強いほど――富を除く――，かつ，否定の度合が弱いほど生活目標として浸透する割合も高くなるという傾向をみてとることができる（富に関しては，認知者グループ内での生活目標としての浸透の割合は，認知の度合の強弱にかかわらず，一定である）。

表4を成人，大学生，高校生，中学生の別にみてみると，地位に関しては成人および大学生において，成功に関しては中学生において有意差がみられている。地位の生活目標としての把握率を成人と大学生のそれぞれにおいてみてみると，大学生においてはさきにみた全体的傾向とほぼ同様の傾向がみられているものの――ただし，規範的側面について「どちらともいえない」とする人々における生活目標の把握率がもっとも低くなっている点が異なっている――，成人においてはかなり異なる傾向をみせている。すなわち，成人における生活目標の把握率をみてみると，地位について文化的目標の規範的側面を「やや否定」する人々においてもっとも高く，「認知」あるいは「やや認知」の人々において低くなる――ただし，もっとも低い割合を示しているのは「否定」の人々においてである――という傾向にあり，したがって，規範的側面の認知と生活目標としての把握との間に，全体的傾向にみられたような対応関係を認めることはできない。中学生における成功の生活目標としての把握率の傾向は，さきの全体的傾向とほぼ同様であり，わずかに，成功について文化的目標の規範的側面を「やや否定」する人々の把握率から「やや認知」する人々の把握率までの差がより小さいものとなっている点で違いがみられているにすぎない。

以上の考察は，人々の抱く諸生活目標のひとつとしての地位，富，成功についてなされたものである。したがって，これを補足するためにも，最重視生活目標としての地位，富，成功に関して，文化的目標の価値実体的側面と規範的側面のそれぞれについての人々の認知－否定とその程度別に，生活目標としての把握率をみておこう。この点を表示したのが表5である。ただし，表5は，地位，富，あるいは成功を最重視生活目標として把握している人々の実数がかなり少ないため，成人，大学生，高校生および中学生を合計した全体の数値のみを計上してあるにとどまっている。

表5では，文化的目標の価値実体的側面の認知－否定別をみても，また，規範的側面の認知－否定別をみても，富に関してのみ有意差がみられている。したがって，富についてのみ最重視生活目標としての把握率の傾向をみてみることとする。まず，価値実体的側面の認知－

否定とその程度別にみた傾向は，つぎのとおりである。すなわち，富の最重視生活目標としての把握率は，富を文化的目標の価値実体として「認知」している人々においてもっとも高く（1.0割），ついで「やや認知」（0.6割），「やや否定」（0.4割），「どちらともいえない」（0.2割）の順となり，富が文化的目標の価値実体であることを「否定」する人々においてもっとも低い（0.1割）という傾向である。したがって，富に関しては，「やや否定」と「どちらともいえない」との間で逆転現象がみられているものの，文化的目標の価値実体としての認知と最重視生活目標としての把握率との間に，ほぼ一定の対応関係が存在しているといえる。つまり，最重視生活目標としての浸透は，富を文化的目標の価値実体として認知している人々においてより多くみられ，しかも，認知の度合が強く，否定の度合が弱いほど，最重視生活目標として浸透する割合も高くなるという傾向をみることができるのである。

表5　文化的目標の認知－否定別　最重視生活目標の把握率

	文化的目標の価値実体としての認知－否定の別				
	認　知	やや認知	やや否定	否　定	どちらともいえない
地　位	3.8%	2.4%	3.3%	0.0%	2.7%
富***	10.4	5.9	3.8	1.0	1.6
成　功	3.5	2.1	1.6	1.8	0.7
	規範的側面の認知－否定の別				
	認　知	やや認知	やや否定	否　定	どちらともいえない
地　位	4.8%	3.4%	2.8%	1.6%	2.7%
富**	7.6	5.6	6.8	3.5	9.5
成　功	4.3	2.9	1.0	1.6	2.1

注1　最重視生活目標の把握率の算出も，表3の注1と同一の手順によっている。
注2　数値は，成人，大学生，高校生，中学生の合計である。
注3　＊＊＊はP＜0.01で，＊＊はP＜0.05で有意差あり。地位と成功に関しては，いずれのばあいもP＜0.10でみて有意差なし。

つぎに，規範的側面の認知－否定とその程度別にみてみると，つぎのとおりである。すなわち，富の最重視生活目標としての把握率は，文化的目標の規範的側面を富に関して認知も否定もしていない（「どちらともいえない」）人々においてもっとも高く（1.0割），ついで「認知」（0.8割），「やや否定」（0.7割），「やや認知」（0.6割）の順となり，富に規範的側面が付与されていることを「否定」する人々においてもっとも低くなっている（0.4割）。したがって，富の最重視生活目標としての浸透は，富に付与された規範的側面を認知も否定もしていない無意識層においてもっとも多くみられているが，これを除くと，おおまかにみて，価値実体的側面についてみられた傾向と同様の傾向を指摘することができる。つまり，富を文化的目標の価値実体として認知している人々において，しかも，認知の度合が強く否定の度合が弱いほど，富の最重視生活目標としての浸透がより多くみられているのである。しかし，その差は，より小さいものとなっている。

以上にみてきたところから，若干の例外はあるものの，文化的目標の価値実体的側面についての，あるいは規範的側面についての人々の認知を媒介として，文化的目標の主要価値実体と人々の選択する生活目標との間にほぼ一定の対応関係が存在し，文化的目標を，その価値実体的側面もしくは規範的側面において認知している人々の方が，これを否定している人々よりも，しかも，認知の度合が高く否定の度合が低いほど，文化的目標の価値実体を生活目標としてより多く選択する傾向にある，ということができるのである。

4　文化的目標の価値規準的機能とその実態

文化的目標の主要価値実体と人々の選択する生活目標との間に一定の対応関係が認められたならば，つぎに，その関係のあり方を考察することが必要となる。すなわち，人々の生活目標の選択を文化的目標の機能的帰結として位置づけることができるか否かについての検討がなされなければならないのである。この問題は，人々の生活目標の選択理由を知ることによって解明できる。かりに，人々の生活目標の選択が各人の価値観に基くものであれば，当の価値観が文化的目標の価値規準的機能の潜在的帰結であるか否かは別として，直接的には，その選択を文化的目標の機能的帰結として位置づけることはできない。むしろ，文化的目標の認知 —— 価値実体についての認知と規範的側面についての認知 —— そのものが，当の価値観から帰結したものだとみなすこともできる。しかし，マスコミや社会的風潮の影響という社会的，文化的次元に生活目標の選択理由を求めることができるのであれば，その選択は，文化的目標が人々の価値規準として機能していることの帰結として考えることができるのである。

そこで，文化的目標の価値実体であるところの地位，富，成功のいずれかを最重視生活目

標として選択しているグループと，その他の目標価値（社会奉仕，余暇の享受，能力・才能，人なみの生活）を最重視生活目標として選択しているグループとに分けて，それぞれの選択理由をみてみたのが表6である。諸生活目標のひとつとしての生活目標 —— 以下，二義的生活目標という —— ではなく，最重視生活目標の選択理由をみたのは，この方が，人々の意識において選択理由がより明確になると考えたからである。

文化的目標と人々の生活目標との対応関係は，現実には相互作用関係として捉えられるものの，分析的には，文化的目標が独立変数に位置し，人々の生活目標が従属変数となるような関係と，その逆に，人々の生活目標が独立変数に位置し，文化的目標が従属変数となるような関係の，2つに区分される。前者は，文化的目標の価値規準的機能の —— 文化的目標の価値実体としての目標価値の認知および目標価値に付与された規範的側面の認知を媒介とした —— 帰結としての生活目標の選択という関係であり，後者は，生活目標の価値づけをとおしての当該目標価値の文化的目標としての認知という関係である。これを，表6に示された選択理由をとおしてみてみるならば，すでに指摘してあるように，前者は「マスコミの影響」と「社会的常識」の2つをとおして，後者は「自己の価値観」をとおして捉えることができる[10]。「自己の価値観」の形成にマスコミや社会的常識が影響を与えているということは十分に考えられることであるが，ここでは，人々の顕在的意識に現われた直接的理由を問題としており，したがって，両者は相互に独立したものと位置づけることができる。

表6　最重視生活目標の選択理由

最重視生活目標 ＼ 選択理由		両親等の期待	教師や友人の影響	職場の現実	子どもの家族の生活や将来	自己の価値観	マスコミの影響	社会的常識	なんとなく	その他	計
成人・大学生	地位・富・成功	6.6	3.9	11.8	18.4	32.9	3.9	15.8	6.6	0.0	100%(76)
	その他	1.4	7.0	8.0	9.0	50.2	3.3	3.9	16.4	0.8	100%(659)
	計	1.9	6.7	8.4	9.9	48.4	3.4	5.2	15.4	0.7	100%(735)
高校・中学生	地位・富・成功	6.7	3.4			51.7	12.4	10.1	14.6	1.1	100%(89)
	その他	2.6	4.9			62.7	6.9	2.9	19.8	0.2	100%(577)
	計	3.2	4.7			61.3	7.7	3.9	19.1	0.3	100%(666)

注1　その他に含まれるのは，社会奉仕，余暇の享受，能力・才能，人なみの生活の4つである。
注2　表頭の計の列の(　)内は実数である。
注3　成人・大学生および高校・中学生の両グループともに，$P<0.01$で有意差あり。

表6から，地位，富，成功のいずれかを最重視生活目標として選択した理由をみてみると，成人・大学生においては「マスコミの影響」3.9%，「社会的常識」15.8%，「自己の価値観」32.9%となっており，高校・中学生においては「マスコミの影響」12.4%，「社会的常識」10.1%，「自己の価値観」51.7%となっている。つまり，地位，富，成功という目標価値の最重視生活目標としての選択は，成人・大学生においても，高校・中学生においても，「マスコミの影響」や「社会的常識」を理由としているよりも，「自己の価値観」を理由としてなされることの方が多く，しかも，「マスコミの影響」と「社会的常識」の2つを合わせても，「自己の価値観」を理由としている人々よりも少ないのである。

しかし，その他の目標価値についてその選択理由をみてみると，成人・大学生においては「マスコミの影響」3.3%，「社会的常識」3.9%，「自己の価値観」50.2%となっており，高校・中学生においては「マスコミの影響」6.9%，「社会的常識」2.9%，「自己の価値観」62.7%となっている。これと，地位，富，成功についてさきにみたところとを比較してみると，成人・大学生と高校・中学生のいずれにおいても，地位，富，成功の方に，「マスコミの影響」と「社会的常識」が多く，「自己の価値観」が少ないという傾向がみられている。つまり，地位，富，成功の最重視生活目標としての選択には，「マスコミの影響」や「社会的常識」が理由とされることが相対的に多く，反対に，「自己の価値観」が理由とされることは相対的に少ないという傾向があるのである。

要するに，目標価値のすべてを通じて，最重視生活目標としての選択は，「自己の価値観」を理由としてなされるばあいの方が，「マスコミの影響」と「社会的常識」の2つの理由を合わせてみたばあいよりもより多くみられているが[11]，地位，富，成功の最重視生活目標としての選択に際しては，「マスコミの影響」や「社会的常識」を理由としているばあいが相対的に多くみられているのである。したがって，人々の個人的価値観による最重視生活目標の選択のうちの一定程度（たとえば，目標価値全体の平均値）を，すべての目標選択の根底に共通してみられる所与の前提として位置づけるならば――こうした前提は，「自己の価値観」を理由とした最重視生活目標としての選択が大半の目標価値を通じて最大の理由となっており，また，すべての目標価値についてかなり大きな割合をもってみられている[12]ことから可能となる――，文化的目標の機能的帰結としての生活目標の選択という関係が，地位，富，成功という主要価値実体についてみられているといえるのである。つまり，文化的目標の価値規準的機能の存在が事実としていえるのである。

そこで，つぎに，文化的目標の価値規準的機能の実態が考察されなければならないが，この点については，紙幅の制約から，この調査研究でえられた知見を以下のように要約的に列記しておくにとどめる。

1　地位，富，成功の生活目標としての選択は，部分的にせよ，文化的目標の価値規準的

機能の帰結として位置づけられる。

2　文化的目標の価値規準的機能は，結果的にみれば，最重視生活目標の選択に対してよりも二義的生活目標の選択に対して，より効果的にみられている。

3　文化的目標の価値規準的機能の度合――文化的目標の価値規準としての機能度――を，「マスコミの影響」が生活目標の選択理由に占める割合と「社会的常識」のそれとの和と，生活目標の把握率との積として算出してみるならば，それは，文化的目標の価値実体によって異なっており，富においてもっとも高く，ついで成功となり，地位においてもっとも低くなっている（注11および表1を参照）。

4　注11および表1からわかるように，生活目標の選択理由において「マスコミの影響」と「社会的常識」とが占める割合と，生活目標の把握率のいずれもが人々の属性――成人，大学生，高校生，中学生の別――によって異なっているのであるから，文化的目標の価値規準的機能の度合もこれらの属性に応じて異なって現われている。つまり，それは，高校生と中学生においてもっとも高く，ついで大学生となり，成人においてもっとも低くなっている。

5　注11および表1に準拠して，文化的目標の主要価値実体と人々の属性とを組み合わせてみてみると，つぎのような傾向が認められる。

①地位，富，成功を通じて，文化的目標の価値規準的機能の度合は，成人においてもっとも低い。

②大学生，高校生および中学生の三者間では，地位に関しては中学生において，富に関しては高校生において，成功に関しては大学生において，文化的目標の価値規準的機能がもっとも高い度合で現われている。

6　文化的目標の価値規準的機能は，文化的目標についての人々の認知を媒介として顕現化している。つまり，文化的目標の価値規準的機能の度合は，生活目標の選択理由を与件とすれば，人々が文化的目標を認知しているときにおいてより高く，人々がこれを否定しているときにおいてより低いということが，そして，また，前者のばあいには，認知の度合に対応して価値規準的機能の度合も高くなり，後者のばあいには，否定の度合に対応して価値規準的機能の度合も低下するということが，一般的傾向として存在している。こうした傾向は，文化的目標の価値実体的側面と規範的側面のいずれについての人々の認知を媒介としてもみられている。

7　文化的目標の価値規準的機能が，その度合において，人々の属性によって異なって現われているのは，生活目標の選択理由を与件とし，かつ，文化的目標の価値実体の達成可能性についての認知を前提とすれば，文化的目標についての認知度が人々の属性に応じて異なっているからだと考えられる[13]。

8　文化的目標の価値実体によって文化的目標の価値規準的機能の度合が異なって現われ

ているのも，同様に，文化的目標についての認知度が文化的目標の価値実体によって異なっているからだと考えられる。しかし，今回の調査の結果にもとづいて，人々の文化的目標の認知度を価値実体的側面において算出してみるならば，地位1.04，成功0.90，富0.59となり[14]，表1で示された生活目標の把握率と正反対の順序となっている。このことは，文化的目標の価値実体を達成することの現実的可能性が地位においてより低く，富においてより高く認知され[15]，そして，この点が地位と富の生活目標としての人々の選択に大きく影響しているからだと考えられる。つまり，文化的目標の価値実体の達成可能性についての人々の認知も，また，文化的目標の価値規準的機能を顕現化する媒介的機能を担っていると考えられるのである（表7参照）。

表7　業績主義的達成様式の効果の認知－否定別
生活目標の把握率

		業績主義的達成様式の効果の認知－否定の別				
		認　知	やや認知	やや否定	否　定	どちらともいえない
地位	成　人	10.0%	7.6%	7.4%	3.4%	9.6%
	大学生**	23.1	24.6	13.4	12.2	4.9
	高校生**	28.6	16.7	8.6	18.8	11.1
	中学生**	29.3	13.9	11.6	19.6	12.1
	計***	23.4	15.2	10.2	11.4	9.4
富	成　人*	38.2	30.6	21.4	23.1	22.7
	大学生	39.7	28.8	31.4	30.0	29.7
	高校生	51.9	39.8	56.4	47.8	48.8
	中学生	46.1	39.8	46.2	40.0	33.3
	計***	44.2	34.3	37.4	33.6	33.8
成功	成　人**	14.9	9.2	8.5	2.5	10.0
	大学生*	36.1	21.9	16.7	22.5	18.2
	高校生**	22.1	30.2	25.4	11.0	29.4
	中学生	26.1	26.5	20.0	23.3	15.2
	計***	23.2	20.8	17.9	13.0	18.3

注1　業績主義的達成様式の効果の認知－否定は，以下の設問文に対する回答――「そう思う」（認知），「どちらかといえばそう思う」（やや認知），「どちらかといえばそうは思わない」（やや否定），「そうは思わない」（否定），「どちらともいえない」から1つを選択――から把握された。

地位：今の社会は，自分の能力や努力しだいで，権限とか責任とかのある高い地位や職業に

つけたり，一流の会社に就職したりすることのできる社会だ。

富　：今の社会は，自分の能力や努力しだいでお金や財産をどんどん増やしていくことができる社会だ。

成功：今の社会は，自分の能力と努力しだいで，だれにでも人生において「成功」するチャンスが与えられている社会だ。

注2　生活目標の把握率はつぎの例のようにして算出されている。

$$\text{(例)}\quad \text{地位の生活目標としての把握率（於認知）} = \frac{\text{地位を生活目標として選択した人数}}{\text{地位について業績主義的達成様式の効果を認知している人数}} \times 100$$

注3　＊＊＊はP＜0.01で，＊＊はP＜.05で，＊はP＜0.10で有意差あり。

9　文化的目標の価値規準的機能を顕現化する媒介的機能の度合を，文化的目標の価値実体的側面についての認知と規範的側面についての認知とで比較してみると，前者における方がより大きいものとなっている。しかし，価値実体別にみてみると，こうした傾向は，地位と富においてのみ認められ，成功においては両者間の差異はほとんど認められていない（表3および表4を参照）。

10　文化的目標の価値実体的側面についての人々の認知が有している媒介的機能をとおして，文化的目標の価値規準的機能の度合を価値実体別にみてみると，以下の事実が認められる（表3を参照）。

①地位においては，これを文化的目標の価値実体として否定する度合が低くなり，反対に認知する度合が高まるにつれて，価値規準的機能の度合は，放物線的に上昇している。

②富においては，文化的目標としての認知－否定の分岐点（認知でも否定でもないというみかた）をはさんで，一方で文化的目標の価値実体としての否定の度合が低くなるにつれて，他方で認知の度合が高くなるにつれて，価値規準的機能の度合も上昇するという二元的傾向がみられている。ただし，高校生においてはこれと若干異なる傾向がみられている。

③成功における傾向も，富のそれとほぼ同様である。

④地位，富，成功の3つにおいて，文化的目標の価値実体としての認知－否定の別とその度合に応じた価値規準的機能の度合の変化を比較してみると，その変化の幅は地位と富においてより大きく，成功において比較的に小さいという傾向がみられている。したがって，文化的目標の価値実体的側面についての認知が有している媒介的機能の度合は，地位と富において高く，成功において比較的に低いということができる。

11　文化的目標の規範的側面についての人々の認知が有している媒介的機能をとおして，文化的目標の価値規準的機能の度合を価値実体別にみてみると，以下の事実が認められる（表4を参照）。

①地位においては，規範的側面の認知－否定の分岐点をはさんで，一方で規範的側面の否定の度合が低くなるにつれて，他方で認知の度合が高くなるにつれて，価値規準的機能の度合も上昇するという二元的傾向がみられているが，規範的側面の認知－否定の分岐点の周辺では，価値規準的機能の上昇－下降の変化はほとんどみられていない。なお，成人と大学生においてはこれと異なる傾向がみられている。

②富においては，規範的側面の否定から認知にかけて，しかも，否定の度合が低く，認知の度合が高くなるにつれて，一直線的に価値規準的機能の度合も上昇していくという傾向がみられている。

③成功においては，富にみられた傾向がいっそう明確にみられている。

④規範的側面についての認知－否定の別とその度合に対応した価値規準的機能の度合の変化は，その大きさにおいて，地位，富，成功の三者間にほとんど差異がない。したがって，文化的目標の規範的側面についての認知が有している媒介的機能の度合が価値実体によって異なるという傾向は，ほとんどみられていないといえる[16]。

5 まとめ

マートンによれば，文化的目標の概念は，万人に対し正当な対象として提供され，文化的に定められた (defined) 目標，目的，関心からなり，アスピレーションの準拠枠組 (a frame of aspirational reference) を内包するところのもの，として定義される[17]。しかし，それは，また，人はみな高遠な目標に向って努力しなければならないとする文化原理の承認の命令[18]，あるいは，成功への努力の社会的に型式化された万人への期待[19]でもあるのである。

要するに，マートンの文化的目標の概念には，価値実体としての目標価値，価値規準的機能，目標達成努力の規範的強調という3つの側面が同時に含まれているのである。本稿の目的は，このうち，価値規準的機能の有無を検証し，その実態を把握することにあった。この文化的目標の価値規準的機能とは，文化的に価値づけられた，それゆえ，個人的目標，目的，関心から相対的に独立した特定の目標，目的，関心（価値実体としての目標価値）に付与されたところの，個々人の欲求内容とそのありようを規定する価値規準としての作用を意味しており，したがって，角度を換えれば，「社会の成員としての達成目標を一般的なかたちで規定している理想価値」[20] としての機能だということもできる。

本稿では，人々の生活目標を指標として，このような価値規準的機能の有無とその実態を実証的に考察してきた。その結果，以下のように結論づけることができる。すなわち，文化的目標の価値規準的機能は，文化的目標の価値実体の達成可能性についての人々の認知を前提とすれば，文化的目標の価値実体的側面と規範的側面についての人々の認知を媒介として

顕現している――ただし，媒介的機能の度合は前者においてより大きい――。したがって，人々の属性や価値実体に応じてこれらの側面についての人々の認知度が異なれば，それに応じて，文化的目標の価値規準的機能の度合も異なってくる。現実には，文化的目標の価値規準的機能の度合は，人々の属性別にみれば，高校生と中学生においてもっとも高く，ついで大学生となり，成人においてもっとも低く，価値実体別にみれば，地位，富，成功の三者のうちで，富においてもっとも高く，ついで成功となり，地位においてもっとも低くなっている。なお，地位，富，成功という文化的目標の主要価値実体のいずれかを生活目標のひとつとしている人々は，成人，大学生，高校生，中学生の全体でみてほぼ半数におよんでいるが，しかし，これらの人々のこのような生活目標の選択のすべてが，文化的目標の価値規準的機能の直接的帰結だとは必ずしもいえない。つまり，文化的目標の価値規準的機能は，人々の生活目標への直接的帰結という観点からみるかぎり，目標達成の困難さもあって[21]，比較的少数の人々のうちにのみ顕現しているにすぎないのである。

注

(1) 米川茂信「アノミー概念における文化的目標の実証的研究」『淑徳大学研究紀要』第19号，1985，pp. 117－156.

(2) 同上論文，p. 153.

(3) 同上論文，pp. 148－149.

(4) 個人の目標に生活目標という用語を付して，これを文化的目標から区別したのはメイヤーとベルであるが，その定義は必ずしも明確になされているわけではない（Meier, D.L. and Bell, W., Anomia and Differential Access to the Achievement of Life Goals, *American Sociological Review*, vol. 24, 1959, p. 192)。本稿では，生活目標を，各人が現時点で抱いている生涯の目標として，あるいは，これまでの人生において一貫して抱いてきた目標として定義しておく。

(5) 表1の各生活目標は，以下の設問文によって被調査者に提示された。

社会奉仕：目立たなくても，社会のために役立つようなことをしたい。
有　　名：プロのスポーツ選手や芸能人などのような有名人になりたい。
地　　位：大きな権限や重い責任のある高い地位や社会から高く評価されているような職業につきたい。
余暇の享受：趣味や教養を高めるなど余暇生活を十分に楽しみたい。
富　　：お金や財産をできるだけ多くたくわえたい。
能力・才能：自分の能力を十分に発揮できるような仕事をとおして，自分の才能を高めたい。
名誉・名声：名誉や名声を得るなど，多くの人々から自分の存在を認めてもらいたい。
人なみの生活：人なみ（世間なみ）の生活だけは送れるようにしたい。
成　　功：なんであれ，まわりの人たちから「成功した」と思われるようになりたい。
出　　世：なんであれ，まわりの人たちから「出世した」と思われるようになりたい。

(6) 地位，富，成功という目標価値が現代日本社会において文化的目標の主要価値実体をなしているという点については，米川，前掲論文，pp. 124－126，141－152で実証的に考察されている。

(7) 米川茂信「マートン・アノミーの概念分析」『淑徳大学研究紀要』第15号，1981，pp. 79－81. 同前掲論文，1985，pp. 141－152.

(8)　この点についての設問文はつぎのとおりである。

地位：今の社会は，権限とか責任とかのある高い地位や職業についたり，一流の会社に就職したりすることができるよう努力することが大切だと思われているような社会だ。

富　：今の社会は，お金や財産をできるだけ多くもつよう努力することが大切だとされている社会だ。

成功：今の社会は，人生において「成功」するために努力することが大切だと思われている社会だ。

(9)　この点についての設問文はつぎのとおりである。

地位：今の社会は，権限とか責任とかのある高い地位や職業につけなかったり，一流の会社に就職したりすることのできない人たちには，「人生の敗北者」とか「落ちこぼれ」，「落伍者」などのレッテルが貼られてしまうような社会だ。

富　：今の社会は，お金や財産をもつことができない人たちには，「人生の敗北者」とか「落ちこぼれ」，「落伍者」，「貧乏人」などのレッテルが貼られてしまうような社会だ。

成功：今の社会は，人生において「成功」することに失敗してしまった人たちには，「人生の敗北者」とか「落ちこぼれ」，「落伍者」などのレッテルが貼られてしまうような社会だ。

(10)　これらの選択理由は，つぎの設問文によって被調査者に示された。

マスコミの影響：新聞やテレビ，ラジオ，書物や雑誌などの影響を受けて，そのような目標がとくに価値があると思ったから。

社会的常識：今の日本の社会では，そのような目標をもつのはあたりまえのことだから。

自己の価値観：自分自身でそのような目標に価値があると考えたから。

(11)　これら3つの選択理由を目標価値別にみてみると，つぎの表のとおりである。

目標価値別にみた最重視生活目標の選択理由

		社会奉仕	有名	地位	余暇の享受	富	能力・才能	名誉・名声	人なみの生活	成功	出世	計
		%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
成人・大学生	自己の価値観	44.0	33.3	40.0	51.2	27.0	68.0	42.9	21.7	36.8	50.0	48.2
	マスコミの影響	7.3	33.3	5.0	4.1	5.4	3.3	0.0	0.0	0.0	0.0	3.4
	社会的常識	2.8	0.0	15.0	1.6	16.2	1.1	9.5	11.8	15.8	0.0	5.2
	その他の理由	45.9	33.4	40.0	43.1	51.4	27.6	47.6	66.5	47.4	50.0	43.2
高校・中学生	自己の価値観	60.8	57.6	63.6	57.8	44.9	74.4	46.7	36.0	55.6	0.0	60.6
	マスコミの影響	13.9	15.2	18.2	5.5	14.3	7.3	13.3	2.0	0.0	0.0	8.1
	社会的常識	0.0	0.0	4.5	1.8	14.3	0.3	0.0	14.0	5.6	0.0	3.6
	その他の理由	25.3	27.2	13.7	34.9	26.5	18.0	40.0	48.0	38.8	100.0	27.7

成人・大学生および高校・中学生ともP＜0.01で有意差あり。

(12)　「自己の価値観」の占める割合については，前注の表を参照。なお，「自己の価値観」が最大の選択理由となっていない目標価値としては，成人・大学生においては富と人なみの生活が，高校・中学生においては人なみの生活と出世があげられる。これらの目標価値について最大の選択理由をあげてみると，それぞれ順に，「家族の生活や子どもの将来」(29.7%)，「家族の生活や子どもの将来」(27.6%)，「なんとなく」(45.0%)，「なんとなく」(100.0%) となっている。

(13) 文化的目標の価値実体的側面の認知度を人々の属性別に算出してみると，つぎのとおりである。地位：成人0.96，大学生1.07，高校生1.23，中学生0.94。富：成人0.45，大学生0.58，高校生0.71，中学生0.66。成功：成人0.80，大学生0.86，高校生1.03，中学生0.96。また，規範的側面の認知度を同様に算出してみると，つぎのとおりである。地位：成人－0.66，大学生0.00，高校生－0.03，中学生0.02。富：成人－0.57．大学生－0.02，高校生0.33，中学生0.47。成功：成人－0.54，大学生0.19，高校生0.25，中学生0.32。以上の認知度が表1と完全に対応していないのは，主として，文化的目標の価値実体の達成可能性についての人々の認知がもつ媒介的機能も，また，生活目標の把握率に影響しているからだと考えられる（表7を参照)。なお，文化的目標の認知度は，価値実体的側面と規範的側面のそれぞれについての設問――地位，富，成功を文化的目標の価値実体として認知するかそれとも否定するかという設問と，地位，富，成功に規範的側面が付与されていると認知するかそれとも否定するかという設問――に対する回答を基礎に，つぎのような手順で算出された。①各回答カテゴリーにつぎのスコアを与える。「認知」＋2点，「やや認知」＋1点，「やや否定」－1点，「否定」－2点，「どちらともいえない」0点。②このスコアを各価値実体ごとに，かつ，人々の属性別に――成人，大学生，高校生，中学生の別に――，各回答カテゴリーの回答者数に乗じる。③この積を各価値実体ごとの，かつ属性別の全回答者数で除する。この数値が価値実体的側面の，あるいは規範的側面の認知度である。

(14) 算出された認知度は，成人，大学生，高校生および中学生を合計した全体のものである。

(15) 参考までに，業績主義的達成様式の認知度を算出してみると，つぎのとおりである。地位：成人0.04，大学生0.01，高校生0.24，中学生0.62，全体0.22。富：成人0.32，大学生0.27，高校生0.41，中学生0.68，全体0.42。認知度の算出手順は，文化的目標の認知度のそれと同じである。

(16) 成功を生活目標のひとつとしている人々（成人41人，大学生80人，高校生85人，中学生86人）に限定して，その成功観念と当該成功観念を抱いている者の割合（複数回答）を計算してみると，つぎのとおりである。「出世」：成人51.2%，大学生50.0%，高校生42.4%，中学生57.0%(以下，それぞれ順に，成，大，高，中と略)。「高い地位の獲得」：成31.7%，大31.3%，高27.1%，中37.2%。「富の蓄積」：成26.8%，大33.8%，高28.2%，中40.7%。「仕事上の成果」：成41.5%，大50.0%，高60.0%，中58.1%。「人々からの尊敬・賞賛」：成26.8%，大40.0%，高32.9%，中43.0%。「人々による自己存在の認知」：成39.0%，大52.5%，高41.2%，中38.4%。「人世における大成」：成29.3%，大46.3%，高48.2%，中40.7%。「自己の目標・希望の達成」：成61.0%，大72.5%，高72.9%，中70.9%。「その他」：成0.0%，大2.5%，高2.4%，中2.3%。

(17) Merton, R.K., Social structure and Anomie, *American Sociological Review*, vol. 3, 1938, p. 672. Social structure and Anomie, *Social Theory and Social Structure*, Free Press, 1968, enlarged ed., pp. 186－187（森東吾他訳『社会理論と社会構造』みすず書房，1961，p. 122).

(18) Merton, R.K., 1968, pp. 192－193（森他訳，pp. 128－129).

(19) Merton, R.K., Continuities in the Theory of Social Structure and Anomie, *Social Theory and Social Structure*, op. cit., p. 221（森他訳，p. 154).

(20) 宮島喬「アノミーと自我統合の危機」『現代社会学』7，第4巻第1号，1977，p. 73。

(21) 今回の調査結果によると，地位，富，成功のいずれかを最重視生活目標としている人々(成人41人，大学生36人）のうち，その目標を「自分が最初に望んだ程度かそれ以上に達成できた」とみている人々は，20.1%にすぎない(成人31.7%，大学生8.3%)。また，地位，富，成功のいずれかを最重視生活目標としている人々で，その目標を自分が最初に望んだ程度で達成しえていないとみている人々（成人63.4%，大学生83.3%，計72.7%）のうち，「将来は自分が最初に望んだ程度かそれ以上の達成が可能だ」と判断している人々は44.4%にとどまる（成人：29.2%，

大学生56.7%)。

付記　本稿は，昭和59年度文部省科学研究費補助金（一般研究C）の交付を受けて行なわれた研究（研究課題名：現代日本社会のアノミー状況 —— 社会的価値の形成と実態 ——）の一部を発表したものである。残された部分の発表については，他日，別の機会に委ねたい。

The Function of the Frame of Aspirational Reference Included in the Cultural Goals

by Shigenobu YONEKAWA

The purpose of this study is to verify and identify the function of the frame of aspirational reference included in R.K.Merton's concept of cultural goals in the contemporary Japanese society.

For this purpose, the research was carried out by using a questionnaire to 474 adults, 348 college students, 369 senior high school students and 368 junior high school pupils. This questionnaire was designed to obtain the findings concerning the following: (1) the ratio of the persons who hold status, wealth or success —— these are main value entities of the cultural goals —— as life goals; (2) the mediation between cultural goals and persons' life goals by persons' recognition of the value entity of the cultural goals or the normalized character attached to them; and (3) the reasons why persons choose status, wealth or success as life goals.

The conclusions which are drawn from findings are:

1. About half of persons who are investigated hold status, wealth or success as one of life goals. And it may be concluded that such choosing life goals results partly from the function of the frame of aspirational reference included in the cultural goals. These persons choose such life goals through the medium of their recognition of either the value entity of the cultural goals or the normalized character attached to them. And they choose them for the reason of "the effect of mass communications"or"the common sense in this society"at the more high rate than when they choose other life goals.

2. The extent of the function of the frame of aspirational reference is largest in the wealth, medium in the success, and smallest in the status. And also, the extent is largest in senior high school students and junior high school pupils, medium in college students, and smallest in adults. These are owing to the differential rate of recognition of cultural goals —— the aspect of value entity and one of normalized character ——, without considering both the reason of choosing

life goals and persons' recognition of the possibility to attain the value entities of cultural goals.

3. The extent of the function of the frame of aspirational reference is larger when persons acknowledge cultural goals, and smaller when they don't. Such extent of mediating function is larger in recognition of the value entity than in recognition of the normalized character.